

Title	京大広報 No. 506
Author(s)	
Citation	京大広報 (1996), 506: 101-122
Issue Date	1996-10
URL	http://hdl.handle.net/2433/209259
Right	ファイル中には未許諾による非表示部あり.
Type	Others
Textversion	publisher



京大広報

No. 506

1996. 10

目次

〈大学の動き〉

- 井村総長、ニュージーランド訪問…………… 102
- 平成8年9月博士学位授与式…………… 102
- 部局長の交替等…………… 102
- 討論集会
「京都大学の教育を考える（第一回）
—全学共通科目をめぐる—」の開催 …… 103

〈部局の動き〉

- 研究科棟の竣工と創立5周年を迎えた
人間・環境学研究科…………… 103
- 食糧科学研究所
創立50周年記念式典・祝賀会…………… 104

〈医療技術短期大学の動き〉

- 医療技術短期大学部説明会…………… 105

〈日誌〉

- …………… 105

〈訃報〉

- …………… 106

〈保健コーナー〉

- 入学後1年間の飲酒率ならびに喫煙率の
変化…………… 108

〈随想〉

- 桜花巡歴 名誉教授 黒岩 澄雄…………… 109

〈京都大学の百年（第21回）〉

- 京都帝国大学における祝日の変遷…………… 110

〈洛書〉

- 鳳鳥至らずして、洛、書を出だすのこと
池田 秀三…………… 111

〈資料〉

- 平成7年度学生生活実態調査報告…………… 112
- 国立大学教官等の待遇改善に関する
国立大学協会の要望書…………… 114

〈公開講座〉

- 京都大学春秋講義（秋季講座）の開講…………… 116
- 京都大学市民講座の開講…………… 117
- 終了報告—
- 医療技術短期大学部
第9回健康科学公開講座
—日々の健康づくり—…………… 117
- 農学部公開講座
「農林経済・経営・簿記講習会」…………… 118



大学院人間・環境学研究科棟

—関連記事本文103ページ—

農学部公開講座

- 「生物のマクロから超ミクロまでの
スケールトラベル体験」…………… 118

情報処理教育センター公開講座

- 「パーソナルコンピュータと
インターネットの活用」…………… 118

理学部公開講座

- 「現代数学展望」…………… 118

農学部附属演習林公開講座

- 「森のしくみと働き
—芦生演習林への招待—」…………… 119

数理解析研究所公開講座

- 「数学入門」…………… 119

霊長類研究所公開講座

- 「霊長類の進化」…………… 119

防災研究所公開講座

- 「防災学を地域防災計画に活かす」
—防災研究者と実務者との連携をめざして—
…………… 120

総合人間学部公開講座

- 「環境としての自然・社会・文化」
—創造的共生にむけて— …… 120

〈お知らせ〉

- 平成8年京都大学文学部博物館
秋季企画展の開催…………… 121
- 平成8年度附属図書館秋季展示会
「『今昔物語集』への招待」の開催…………… 122

京都大学広報委員会

大学の動き

井村総長、ニュージーランド訪問

井村総長は国立大学協会より依頼を受け、8月19日から27日までの間ニュージーランドに出張し、第5回 UMAP (University Mobility in Asia and the Pacific) 総会に国立大学協会代表として参加すると

ともに、併せてマッセイ大学、オークランド大学、カンタベリー大学、オタゴ大学の各大学を訪問し、高等教育に関する調査・視察を行った。

平成8年9月博士学位授与式

9月27日(金)午前10時30分から、京大会館において、平成8年7月と9月を合わせた博士学位授与式が挙行された。

総長から各授与者に対し学位記が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時40分終了した。

本年7月の学位授与数は、課程博士28名、論文博士43名の計71名、9月の学位授与数は、課程博士16名、論文博士33名の計49名であった。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研究科	7月			9月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
文学研究科	0名	2名	2名	0名	3名	3名
教育学研究科	0	3	3	0	1	1
法学研究科	0	3	3	0	1	1
経済学研究科	1	2	3	0	0	0
理学研究科	6	4	10	2	1	3
医学研究科	14	10	24	2	5	7
薬学研究科	1	2	3	2	3	5
工学研究科	4	8	12	7	15	22
農学研究科	2	9	11	2	4	6
人間・環境学研究科	0	0	0	1	0	1

部局長の交替等

(再任)

東南アジア研究センター所長

坪内良博東南アジア研究センター教授(社会生態研究部門担当)が、9月1日東南アジア研究センター所長に再任された。任期は平成10年8月31日までである。

(新任)

大学院医学研究科長・医学部長

菊池晴彦大学院医学研究科長・医学部長の辞任に伴い、その後任として、本庶 佑大学院医学研究科教授(分子医学系専攻分子生体統御学講座)が10月1日大学院医学研究科長・医学部長に任命された。任期は平成10年9月30日までである。



本庶 佑教授

討論集会「京都大学の教育を考える（第一回） —全学共通科目をめぐって—」の開催

8月28日（水）及び29日（木）の2日間（1泊2日）の日程で、比叡山国際観光ホテルにおいて、討論集会「京都大学の教育を考える（第一回）—全学共通科目をめぐって—」が開催された。この討論集会には、総長をはじめ全学部長を含む教職員約200名と招待者として全学共通科目レビュー委員会の学外委員2名及び米国ハーバード大学ジュームズ・ウィルキンソン教授が参加した。

初日は総長の開会挨拶の後、5班に分かれての班別討論会、3つのセッションからなる夕べの会及び自由討論会が行われ、夜遅くまで熱心な討論が続けられた。2日目は初日の班別討論を踏まえた各班の報告会と全体討論会が開かれ、2日間を通して教養教育のあり方、なかでも語学教育のあり方について活発な意見交換が行われた。

今回の企画は、全学共通科目レビュー委員会が担当したもので、全学の多数の教官が一堂に会して本



学の教育を考える初めての試みであり、日頃接することの少ない他部局の教官との情報交換の場ともなり、これを契機に教養教育の見直しと改善策を検討するうえで、有意義な催しとなった。

部局の動き

研究科棟の竣工と創立5周年を迎えた 大学院人間・環境学研究科

本学初の独立研究科として設置された大学院人間・環境学研究科では、このたび念願の研究科棟が完成した。そこで、研究科棟の竣工を記念し、創立5周年を記念する意も込めて、去る9月9日（月）午後3時から、新研究科棟地階大講義室において、井村裕夫総長はじめ学内外から約200名の出席を得て竣工式を挙行了した。

式では、足利健亮研究科長の挨拶、井村裕夫総長の式辞、安部矩敏施設部長の工事報告に続き、西島安則前総長、藤澤令夫京都国立博物館長の来賓祝辞があり、奥田幹生文部大臣はかからの祝電の披露の後、工事関係者に感謝状の贈呈を行った。式に引き続いて、研究科棟・施設の見学を行い、その後、場所をホリディイン京都に移して記念パーティを開催した。



当研究科は、平成3年4月の発足以来、専有の建物がなかったため、関係各位の御理解、御協力を得て、医学部旧生理学教室棟、附属病院外科研究棟、楽友会館東館及び総合人間学部（旧教養部）等の建物を借用して教育研究を行ってきた。この間、平成

4年度に建物新営が認められ、平成6年着工、平成8年3月の竣工に至ったものである。

当研究科の設置趣旨は、『人間と環境とのさまざまな関わりを明らかにすると共に、その望ましい関わり方を実現しうる新しい科学・技術と人間の在り方の原理的な研究を遂行すること、地域諸文化の調和的共存と新たな国際的文化の創造を可能にする諸条件の解明をめざすこと』にある。

この研究科の趣旨に沿うこと、また、旧教養部キャンパスを分断する巨大な壁にならないことを設計の基本とした本研究科棟（設計者：施設部、川崎清本学名誉教授）は、実験、一般、演習室・書庫の3つのボリュームを南西から北東に雁行する形をとって配され、鉄骨鉄筋コンクリート造り地上5階地下1階建て、延床面積10,824㎡、総工費37億円で建設された。地階に大講義室、特殊実験室、機械室、1階に事務室、2階以上は各階に研究室、実験室、演習室等がグループごとに配置されている。外装は、低層部に石材（ポルトガル産ライムストーン）、中・高層部にアクリル系樹脂吹き付け材、軒部にはアルミニウム材を取り入れ、伝統的素材と近

代的素材との融和と共に、周辺建物との調和を図り、斬新さと風格を兼ね備えた建物となっている。

当研究科は、平成3年設置の人間・環境学専攻に引き続き、平成4年に文化・地域環境学専攻が、本年4月にはアフリカ地域研究専攻が設置され、また明年の環境相関研究専攻設置に向け、現在概算要求中である。今回の研究科棟は第1期工事であり、さらに第2期工事を準備している。

また、この竣工式に合わせ、研究科の広報誌として『人環フォーラム』を創刊した。さらに、記念行事の一環として、11月には記念シンポジウム、明年1月には公開講演会も予定している。

20世紀も終わりに近づき、21世紀に向けて新たなパラダイムの転換が求められている状況の中で、当研究科にも、従来の学問区分の枠を超えた新しい環境研究領域を開拓することが課せられている。研究科棟の完成で、これまで分散して行っていた教育研究の多くの部分を同一の屋根の下で行うことが可能となった。

（大学院人間・環境学研究科）

食糧科学研究所創立50周年記念式典・祝賀会

食糧科学研究所は、昭和21年9月に創立され、本年をもって創立50周年を迎えた。これを記念して9月11日（水）午前11時から京都ホテルにおいて記念式典、祝賀会を行った。

記念式典では、はじめに鬼頭 誠所長が「組織としては常にフレキシビリティを保ち、学際性に富む新しい食糧科学研究の流れを生み出していきたい。」と式辞を述べ、続いて、奥田幹生文部大臣（代理 中西釦治大臣官房審議官）、井村裕夫京都大学総長、古澤 巖農学研究科長、文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議会長岩崎成夫東京大学分子細胞生物学研究所長、満田久輝日本学士院会員・京都大学名誉教授より祝辞があった。また、日本農芸化学会会長、日本生化学会会長及び日本栄養・食糧学会会長をはじめ関係者から寄せられた多数の祝電が披露された。

引き続き祝賀会が催され、西島安則前京都大学総長、京都大学研究所長会議世話役阪上 孝人文科学



研究所長、熊谷英彦農学研究科食品工学専攻主任、沢田敏男元京都大学総長の祝辞の後、沢田元総長の発声で乾杯、全国各地から出席した同窓生及び関係者等360名が歓談した。

（食糧科学研究所）

医療技術短期大学部の動き

医療技術短期大学部説明会

医療技術短期大学部では、7月22日（月）午後1時30分より5時まで、本短期大学部についての説明会を開催した。

説明会には高校生263名、高校進路指導教諭13名の参加者があった。

説明会では、大講堂において、参加者全員に本短期大学部の特色、入試概要、各学科の教育内容を、資料及びスライドを用いて説明した。次に学内施設見学として、6グループに分けて、約1時間学内見学を実施した。最後に、各学科ごとに分かれての個人相談を行い、参加者と教官との懇談の機会を設けた。また、学生生活や入試に関する一般的な相談にも応じた。



(医療技術短期大学部)

日誌

1996年7月1日～8月31日

- 7月6日 医療技術短期大学部第9回健康科学公開講座「日々の健康づくり」（以降、13日、20日、27日）
- 9日 評議会
- 10日 環境保全委員会
- 16日 平成8年度京都大学技術職員研修（第16回）（18日まで）
- 22日 農学部公開講座「農林経済・経営・簿記講習会」（26日まで）
- 25日 農学部公開講座「生物のマクロから超ミクロまでのスケールトラベル体験」（26日、29日～31日）
- 29日 情報処理教育センター公開講座「パーソナルコンピュータとインターネットの活用」（31日まで）
- 〃 理学部公開講座「現代数学展望」（8月2日まで）

- 8月1日 農学部附属演習林公開講座「森のしくみと働き—芦生演習林への招待—」（3日まで）
- 5日 数理解析研究所公開講座「数学入門」（9日まで）
- 19日 総長、国立大学協会代表として第5回UMAP総会出席及びマッセイ大学ほか3大学における高等教育に関する調査・視察のため、ニュージーランドを訪問（27日まで）
- 〃 防災研究所公開講座「防災学を地域防災計画に活かす」（20日まで）
- 22日 霊長類研究所公開講座「霊長類の進化」（23日まで）
- 28日 討論集会「京都大学の教育を考える（第1回）—全学共通科目をめぐって—」（29日まで）

計 報

中井 祥夫 名誉教授



本学名誉教授 中井祥夫先生は、8月7日逝去された。享年69。

先生は、昭和22年京都帝国大学理学部を卒業、同大学理学部副手、助手、同教養部助教授を経て、昭和40年教授に就任、昭和42年に理学部に配置換となり、物理学科輻射物理学講座を担当、平成2年停年により退官し、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、京都大学大学院制度検討委員会委員として、京都大学の教育・研究体制の整備に貢献された。

先生は、光物性物理学、固体分光学および応用物理学の多方面にわたって活躍され、特に世界に先駆けて「瀬谷・波岡型真空紫外分光光度計」の試作に成功されて、本邦における真空紫外分光学の発展の基礎を築かれた。さらには、今日広く注目を浴びているシンクロトン放射光を利用する分光学の萌芽的研究に着手され、東京大学原子核研究所をはじ

め、同物性研究所、国立分子科学研究所等との共同研究を通じて、本学のみならず、わが国の各地において多くの若手研究者を育成されるなど、極端紫外領域における固体の分光学的研究で常に指導的役割をはたされた。

また、先生は色中心国際会議、真空紫外輻射物理学国際会議、ルミネッセンス国際会議、絶縁体における電子励起素過程に関する日米セミナー等、各種国際会議の組織委員等を歴任されて、これらの分野の国際研究交流に多大の貢献をされるとともに、日本分光学会理事および同評議員、同関西支部長を歴任され、また、多年にわたり、日本学術会議の物理学研究連絡委員会委員、同物性委員、国立分子科学研究所極端紫外光実験施設運営委員として、わが国の物性物理学分野の研究の発展に大きく貢献された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院理学研究科)

山田 淳三 名誉教授



本学名誉教授 山田淳三先生は、平成8年8月17日逝去された。享年66。

先生は、昭和31年東京大学大学院生物系畜産学専攻博士課程を修了、京都大学医学部附属動物実験施設助教授を経て昭和61年同教授に就任、実験動物学を担当された。平成5年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和62年から同附属動物実験施設長として、また、平成4年から京都大学動物実験委員会委員長として本学における動物実験環境の整備拡充に貢献された。

先生は、実験動物学、中でも実験動物の遺伝学的統御、ラット遺伝子地図の構築、並びに疾患モデル動物の開発に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、遺伝学の分野において多大の貢献をされた。主な著書に『実験動物ハンドブック』、『動物実験法』等がある。

また、日本実験動物学会理事、日本疾患モデル学会幹事、日本実験動物協会副会長、関西実験動物研究会会長等の要職を歴任された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医学部)

河野 健二 名誉教授



本学名誉教授 河野健二先生は8月10日逝去された。享年79。

先生は、昭和15年京都帝国大学経済学部を卒業、同大学経済学部助手、同大学人文科学研究所助教授、同大学教養部教授を経て、昭和43年に同大学人文科学研究所教授に配置換えとなり、西洋社会研究部門を担当された。昭和55年に停年により退官、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和45年から49年および53年から55年まで人文科学研究所長に就任、京都大学評議員その他を兼ね、大学の管理運営にも貢献された。

先生は経済思想史、とりわけ近代フランス社会に焦点を当てた研究に力を注がれ、『絶対主義の構造』『フランス革命とその思想』『フランス現代史』をは

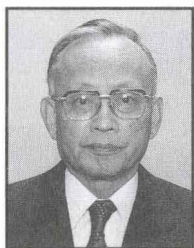
じめとする多数のすぐれた業績を残された。また研究所における共同研究の推進についても多大の成果をあげられ、それらは『世界資本主義の形成』『ブルードン研究』『ヨーロッパ1930年代』その他として公刊されている。

退官後は、中部大学国際関係学部長、京都市立芸術大学長、京都市生涯学習総合センター所長などを歴任された。また、日仏歴史学会の会長としての活動その他をとおして、日本とフランスの学術交流の発展にも大きく寄与され、昭和50年にフランス・パルム・アカデミック勲章オフィシェ級、平成4年に京都市文化功労者、同5年に京都府文化賞をそれぞれ受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(人文科学研究所)

太壽堂 鼎 名誉教授



本学名誉教授 太壽堂 鼎先生は、8月28日逝去された。享年70。

先生は、昭和28年京都大学法学部を卒業され、同大学法学部助手、助教授を経て昭和41年教授に昇任され国際法講座を担当された。この間昭和53年から55年まで評議員、同57年から58年まで法学部長を務められた。平成2年停年により退官され京都大学名誉教授の称号を受けられた。退官後は、姫路獨協大学法学部教授として御活躍中であつた。

先生は、我が国の国際法学の発展と国際的評価の向上に多大の貢献をされた。先生の学問は、学位論文『国際法における管轄権の研究』に明かなとおり、国際法の基本的機能は管轄権配分にある、との

体系的認識から出発し、国際法全般についての卓抜した学識に加えて政治、歴史、経済等関連諸学の深い理解に立って、歴史的・実証的に緻密な分析を行うものであつた。その手法の手堅さと明快さは、論証の法的合理性を支え、我が国の国際法学徒の研究態度の模範とされてきた。

先生はまた、国際法学会理事及び理事長として学会で指導的役割を果たされるとともに、司法試験審査委員、外務公務員採用Ⅰ種試験委員を務められ、実務界の人材の選抜にもあたられるとともに、学部及び大学院の学生の教育・研究指導にも熱心に取り組まれ、多くの人材を養成された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院法学研究科)

保健コーナー

入学後1年間の飲酒率ならびに喫煙率の変化

全国約100校の国立大学・保健管理センターが集まって、国立大学等保健管理施設協議会を作り、毎年1回、総会と討論を行っている。その活動内容は、保健管理センターが抱えている諸問題の討論とか健康教育の推進—テキスト・ブック「学生と健康」の発刊、エイズの予防対策として講演会の開催、パンフレットやエイズ・ハンドブックの発行などが主たるものである。また、保健管理センターが学生の健康維持と疾病予防を中心として設立された施設であることから、1984年、1990年に「学生の健康白書」を作成している。その内容は、定期健康診断からみた学生の健康状態—身体的ならびに精神的—の調査と統計処理、傷病罹患状況に関する調査、傷病による休学・退学・死亡者に関する調査などが中心である。この度、1995年度の健康白書を作成するにあたり、学生のライフ・スタイルに関わる調査や、全国的にアレルギー疾患を有する学生の増加がみられることから、これらの実態調査も併せて行った。現在その集計が行われているところであるが、京都大学でも1995年4月の定期健康診断時に喫煙や飲酒に関するアンケート調査を実施したが、折角の機会であるのでこれらの調査を出来る限り引き続き継続的に行うこととした。

今回は、1995年度に入学した男女学生の調査結果をまとめた。入学時に実施する定期健康診断の受検率はほぼ100%であり、2回生になった今年の受検率は94.1%であった。アンケートに答えて回収され

たのは1回生で約99%、2回生で約98%である。1995年入学時の男子学生2,491人のうち、飲酒をする学生は423人(17.0%)で、女子489人ではわずかに24人(4.5%)にすぎなかった。各学部別にみると0~30.0%とバラツキがみられた。文系と理系に分けてみると、文系男子で20.4%、理系男子で15.4%の飲酒率であり、女子ではそれぞれ5.7%と3.8%であった。アルコールの種類としては男女ともに90%以上が“ビールのみ”か“ビールと日本酒”という組み合わせである。飲酒量はビールに換算して1週間に500ml前後が大部分であった。喫煙をする学生は、入学時に男子全体で87人(3.9%)、女子ではわずかに2人(0.6%)であった。

1996年4月の定期健康診断時、2回生全員に入学

アンケートの質問項目

1. 飲酒	
(1) お酒を飲みますか	1 飲まない 2 飲む
(2) 1で「飲む」と答えた方	何をどの位飲みますか ①ビール ②日本酒 ③ウイスキー ④焼酎 ⑤ワイン ⑥その他 ()
*〔 〕内に、上記のアルコール飲料の番号を記入して下さい。	*〔 〕を()cc, ()本、週()回 *〔 〕を()cc, ()本、週()回
2. 喫煙	
(1) たばこを吸いますか	1 吸わない 2 吸う
(2) 1で「吸う」と答えた方	()歳から現在まで 1日()本
その他(現在禁煙中等具体的に)	()

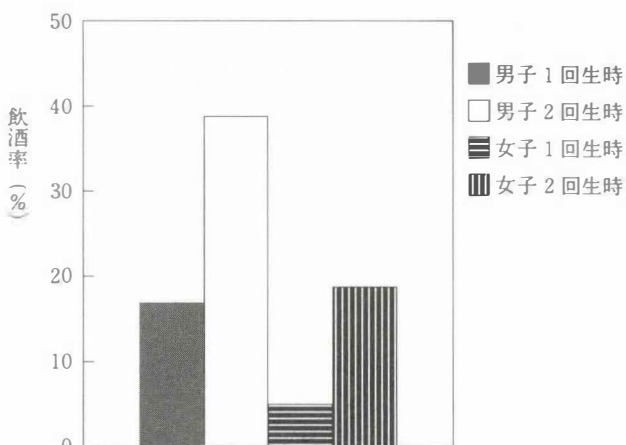


図1. 1995年度入学学生の飲酒率

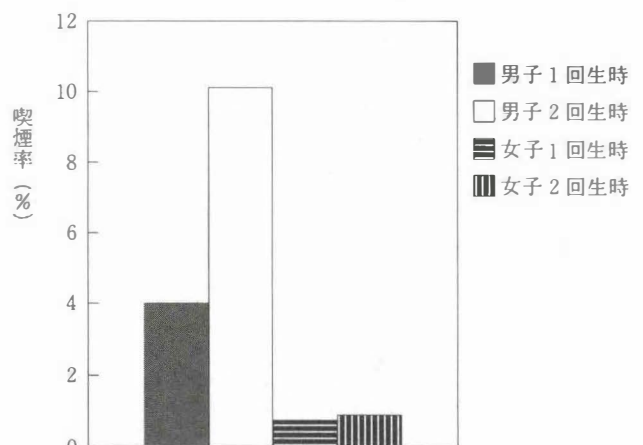


図2. 1995年度入学学生の喫煙率

資料

平成7年度学生生活実態調査報告

学生部は厚生施策の企画・実施のための基礎資料を得るため、昨年11月にこの調査を行い、その集計結果を『学生生活実態調査報告』としてまとめた。

学生生活の現状について理解を深めるため、ここに参考として調査の概要を紹介する。なお、本調査報告に関心のある方は、学生部厚生課厚生企画掛、各学部教務掛（総合人間学部は学生・厚生掛、工学部は厚生掛）で報告書を閲覧されたい。

なお、10年前の調査（昭和60年度）の概要も併せて記す。

調 査 の 概 要

1 調査の目的

この調査の目的は、京都大学学生の経済生活の実態を把握し、有効適切な厚生施策を実施するための基礎資料を得ることである。この目的のために、昭和28年以来全学調査を毎年定期的実施し、昭和43年以降は隔年ごとに実施してきた。このたびの調査は、その第29回目にあたる。

2 調査の方法

(1) 企 画

平成7年9月の学生部委員会において調査の期日、対象、方法について実施上の細目を確定した。

(2) 調査期日

平成7年11月1日

(3) 母集団と抽出標本

調査対象は、平成7年10月1日現在における在学学生中、外国人留学生、休学者を除いたものである。

調査対象（抽出割合）

		平 成 7 年 度	昭 和 60 年 度
学 部	男 子 学 生	11,132名（10分の1）	10,121名（10分の1）
	女 子 学 生	1,885名（2分の1）	1,030名（2分の1）
学 部 合 計		13,017名	11,151名
大 学 院	修 士 課 程 学 生	3,112名（4分の1）	1,957名（2分の1）
	博 士（後期）課 程 学 生	1,953名（4分の1）	1,347名（2分の1）
大 学 院 合 計		5,065名	3,304名
学 部 ・ 大 学 院 総 計		18,082名	14,455名

標本学生数、回収数、回収率

			平 成 7 年 度			昭 和 60 年 度		
			標本学生数	回 収 数	回 収 率	標本学生数	回 収 数	回 収 率
学 部	1 ・ 2 年 次 男 子		497名	198名	39.8%	454名	293名	64.5%
	3 年 次 以 上 男 子		618名	441名	71.4%	562名	412名	73.3%
	全 学 女 子		189名	129名	68.3%	517名	354名	68.5%
学 部 合 計			1,304名	768名	58.9%	1,533名	1,059名	69.1%
大学院	修 士 課 程	文科系	144名	99名	68.8%	117名	82名	70.1%
		理科系	638名	564名	88.4%	865名	772名	89.2%
	博士（後期）課程	文科系	88名	55名	62.5%	166名	111名	66.9%
		理科系	402名	312名	77.6%	510名	340名	66.7%
大 学 院 合 計			1,272名	1,030名	81.0%	1,658名	1,305名	78.7%
学 部 ・ 大 学 院 総 計			2,576名	1,798名	69.8%	3,191名	2,364名	74.1%

調査結果の要約

◎学部学生

主			事	項	平成7年度	昭和60年度	増 減 率
家	庭	家庭の所在地	京 都 府 下		9.6%	12.5%	△2.9%
			近畿地方(京都府下を含む)		54.3%	57.2%	△2.9%
		家 計 支 持 者 の 職 業 が 俸 給 生 活 者			78.3%	78.4%	△0.1%
		家 庭 の 全 年 収 (平 均 値)			1,170万円	846万円	38.3%
ア ル バ イ ト	過 去 半 年 間 に アル バ イ ト を し た 者				77.2%	81.9%	△4.7%
	使 途	衣 食 住 , 勉 学 費 に 使 用 し た 者			48.9%	46.3%	2.6%
		上 記 以 外 に 使 用 し た 者			49.7%	53.4%	△3.7%
奨 学 金		受 給 し て い る 者			24.2%	25.0%	△0.8%
通 学	徒 歩 の み				12.6%	8.5%	4.1%
	自 転 車				48.6%	36.3%	12.3%
住 居	自 宅 通 学 者				26.6%	32.1%	△5.5%
	京 都 市 内 居 住 者				77.5%	75.8%	1.7%
勉 学	授 業 ・ 研 究 時 間				4.2時間	3.6時間	16.7%
	自 習 時 間				1.8時間	2.2時間	△18.2%
課 外 サ ー ク ル		加 入 し て い る			73.6%	73.4%	0.2%
収 入 月 額 (自 宅 外 通 学 者)	家 庭 か ら (平 均 値)				100,000円	75,400円	32.6%
	ア ル バ イ ト ・ 奨 学 金 (平 均 値)				40,300円	34,200円	17.8%
	収 入 金 額 合 計 (平 均 値)				142,400円	110,800円	28.5%
支 出 月 額 (自 宅 外 通 学 者)	部 屋 代 (平 均 値)				45,900円	23,900円	92.1%
	食 費 (平 均 値)				38,500円	31,400円	22.6%
	勉 学 費 ・ 書 籍 費 合 計 (平 均 値)				8,400円	8,800円	△4.5%
	支 出 金 額 合 計 (平 均 値)				149,200円	109,900円	35.8%

◎大学院学生

主		事		項	平成7年度	昭和60年度	増 減 率			
家	庭	家庭の所在地	京 都 府 下		17.1%	16.9%	0.2%			
			近畿地方(京都府下を含む)		57.0%	60.1%	△3.1%			
		家 計 支 持 者 の 職 業 が 俸 給 生 活 者			69.0%	65.1%	3.9%			
		家 庭 の 全 年 収 (平 均 値)			1,044万円	717万円	45.6%			
ア	ル	バ	イ	ト	過 去 半 年 間 に アル バ イ ト を し た 者		64.4%	81.1%	△16.7%	
					使 途	衣 食 住 , 勉 学 費 に 使 用 し た 者		71.4%	76.0%	△4.6%
						上 記 以 外 に 使 用 し た 者		28.6%	23.7%	4.9%
奨	学	金	受 給 し て い る 者			54.2%	64.3%	△10.1%		
通	学	徒 歩 の み			17.4%	18.9%	△1.5%			
		自 転 車			41.4%	30.8%	10.6%			
住	居	自 宅 通 学 者			26.5%	26.7%	△0.2%			
		京 都 市 内 居 住 者			89.3%	86.8%	2.5%			
勉	学	授 業 ・ 研 究 時 間			7.2時間	2.7時間	166.7%			
		自 習 時 間			1.5時間	5.4時間	△72.2%			
課 外 サ ー ク ル		加 入 し て い る			26.9%	30.4%	△3.5%			
収 入 月 額 (自 宅 外 通 学 者)	家 庭 か ら (平 均 値)				58,700円	37,800円	55.3%			
	ア ル バ イ ト ・ 奨 学 金 (平 均 値)				85,800円	82,500円	4.0%			
	収 入 金 額 合 計 (平 均 値)				154,600円	122,500円	26.2%			
支 出 月 額 (自 宅 外 通 学 者)	部 屋 代 (平 均 値)				41,800円	22,400円	86.6%			
	食 費 (平 均 値)				43,000円	37,000円	16.2%			
	勉 学 費 ・ 書 籍 費 合 計 (平 均 値)				12,200円	14,000円	△12.9%			
	支 出 金 額 合 計 (平 均 値)				159,300円	122,000円	30.6%			

注記 アルバイトの使途の割合は第一順位の数値を表記した。衣食住、勉学費に使用した者と上記以外に使用した者の合計が100%にならないのは、無回答があるためである。

国立大学教官等の待遇改善に関する 国立大学協会の要望書

6月18日の国立大学協会総会において、国立大学教官等の待遇改善に関する要望が承認され、下記要望書が文部大臣等関係方面に提出された。

平成8年7月18日

国立大学協会会長

吉 川 弘 之

国立大学教官等の待遇改善に関する要望書

国立大学教官等の給与等の待遇改善については、人事院をはじめ関係機関の特段の配慮を得て改善がなされてきたところであり、関係各位のご努力に対して深く感謝する次第であります。

いうまでもなく、近年、教育改革の問題が焦眉の国家的課題とされ、大学についても、教育・研究の充実整備が課題となっております。この課題に応えるうえで、まず何よりも大学自身がその教育・研究体制の改革に取り組むことが必要であり、各国立大学が自己点検・自己評価を実施し、それを自らの大学の改革と活性化の契機とすべく努力しているところであります。

それとともに、大学の質的向上を図るには、その担い手である大学教官等に有為な人材を確保することが基本的前提条件であり、それを充たすためには大学教官等の待遇改善を図ることが一つの必須要件であります。また、平成7年11月15日施行、公布された「科学技術基本法」では、国は、研究者等の職務がその重要性にふさわしい魅力あるものとなるよう、研究者等の適切な処遇の確保に必要な施策を講ずるものとしていただいております。

しかしながら、それはいまだ十分であるとは言えない状況にありますので、さらに以下の諸点につき、ここに重ねて強く要望する次第であります。

記

1. 教育職(一)の俸給水準の引上げを行う等を含め俸給体系を是正すること。

大学は高等教育および学術研究を推進・発展させる中心の存在として社会の付託にこたえて、その

任務を果たしている。科学技術の著しい進展と国際化の時代にあつて、その責務は益々増大しているところである。そのときにあつて、大学の教学の中心の担い手は大学教官であり、教育・研究について絶えざる情熱と高い能力を有する優れた人材を擁することは大学の根本であることに鑑み、その俸給をその職務と責任に見合う水準に引き上げるよう特段の配慮を強く要望する。特に近年、国立大学の教官の給与水準が民間企業研究所や私立大学のそれを大幅に下回っている実態が人材確保の障害の要因ともなっていることに配慮しその急なる改善が待たれる。

また、助手について高校教諭の給与を下回る実態や教務職員の給与の頭打ち等の問題があり、これら職員の給与の格差是正を図る。

なお、以上の俸給水準の引上げと同時に特に中堅教官の給与配分について改善するとともに、教育、研究上の功績顕著な者を優遇するため、特別昇給制度の弾力的運用を図る。

さらに、現行の昇給延伸制度についても、教官の職の高学歴による高年齢就職等による特殊性に着目してその年齢の引上げを図る。

2. 部局長（学生部長、事務局長等を含む。以下「部局長等」という。）について指定職の完全適用を図ること。

部局長等及び教育、研究の功績顕著な教授に対する指定職の適用拡大については改善が図られつつあるが、まだ十分な状況とはいえない。

指定職制度は、特定の職務就任を条件に適用するのが本来の趣旨であることを踏まえ、部局長等については、その在任期間中はすべて指定職俸給表が適用できるよう措置する。

また、特に教育、研究の功績顕著な教授に対して指定職俸給表の適用をさらに拡大する。

3. 管理職手当の適用対象の拡大と増額を図ること。

近年、大学における管理運営の職責が益々重くなりつつある実情に鑑み、全学段階の委員等の学内教育行政の要職にある者について、管理職手当支給の途を開くよう配慮する。

なお、部局長等について指定職の完全適用を前項で要望しているところであるが、指定職が適用

されるまでの間、引き続きその増額を図る。

4. 大学教官特有な職務に見合う手当として「大学研究調整額」(仮称)を新設すること。

大学教官は、高度の専門教育を行うばかりでなく、進展極まりない学術の研究について一定の業績を常に要請される。そのため、各種学会活動や独自の情報の収集等多様な教育・研究活動を遂行することが必須となっている。

しかしながら、このような多様な教育・研究活動に際して、自費から支出する研究費が少なくなることが、当協会財政基盤調査研究委員会が行った全国調査結果により明らかになっている。

この特別な経費負担に対する措置として「大学研究調整額」(仮称)の新設を図る。

なお、職務の特殊性に基づきすでに支給されているものとしては、義務教育教員には「教職調整額」、医師等には「初任給調整手当」等がある。

5. 夜間主コース担当教官に特別な給与措置を講ずること。

主として夜間に授業を行う大学・学部の教官は、昼・夜両コースの教育を担当しており、その勤務形態は特殊なものである。

また、夜間主コースでは主として社会人学生を対象としており、教育上多様な対応が必要である。

これらのことを考慮し、夜間主コース担当教官に特別な給与措置を講ずること。

6. 教育・研究支援職員等の待遇の抜本的改善を図ること。

当協会は、かねてから大学特有の専門職である技術職員等の教育・研究支援職員の抜本的な待遇改善を要望し、「専門行政職俸給表」の適用を切望してきたが、これら職員の現状が同俸給表を適用できる状況に置かれていないとされ、その適用が見送られてきたところである。

しかしながら当協会としても、教育・研究支援職員の在り方について、先に、各国立大学に対し、教室系技術職員の官職の整理と資質の向上を図るため、組織化および研修等についてその実現方を要請し、現在までに職員規模で相当数が組織化され、また、多くの大学において多様な研修が

行われている。

この結果、「専門行政職俸給表」への移行のための条件が整った状況を踏まえて、当協会は第97回総会において専門行政職俸給表への円滑な移行を行うため、「教室系技術職員の専門行政職俸給表適用審査基準」を策定したので、これにより速やかに実現されたい。

また、大学における教育・研究支援職員の教育・研究に果たす役割は大きく、かつ不可欠なものであり、俸給表の種類にかかわらず、これら職員の俸給をその職務と責任に見合う水準に引き上げるよう措置する。

7. 大学の中堅職員(事務系)の待遇改善を図ること。

大学においては、事務長、補佐、係長等の定数が固定されており、豊富な職務経験、職務遂行能力を持つ適任者でありながら、昇任・昇格が限定されるために俸給の上で格差を生じている。このことは、大学の中堅職員等が職務遂行意欲を欠く原因ともなり、ひいては大学運営に重大な影響を及ぼす結果となりかねない。

また、特に近年教育研究の国際化に伴う国際学術交流や留学生受入れ、大学院の整備充実、教育研究システムの多様化、複雑化への対応等高度の専門性を要する新たな業務が激増している。

よって、引き続き専門職員制度を一層拡大するとともに、上位の級別定数について特段の措置を図る。

8. 看護職員の待遇改善を図ること。

医学・医療の進展に寄与する診療、教育、研究の場であることを使命とする大学病院において看護職員に課せられた任務は極めて高度化、専門化しており、その役割は重要なものとなっている。

また、看護婦等の人材確保の促進に関する法律が制定され、待遇の改善が図られてきているが、まだ十分とはいえない。

看護力の強化は、大学病院の運営にとって不可欠の課題であり、初任給を含む給与水準の引き上げを引き続き図る。

また、看護職員の勤務形態の特殊性等に配慮し、勤務環境の改善を図る。

公開講座

京都大学春秋講義（秋季講座）の開講

本学では、財団法人京都大学後援会の協力の下に、下記のとおり「京都大学春秋講義（秋季講座）」を開講します。

本学教職員並びに学生については、各講義とも特別受講枠（無料）30名を設けていますので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込んで下さい。

記

☆月曜講義（5回シリーズ）メインテーマ『世紀末から21世紀を考える』

開 講 日	講 師	テ ー マ
10月14日	法学研究科教授 野 田 宣 雄	近代国民国家の退場か
10月21日	経済学部教授 吉 田 和 男	21世紀の日本型システム
10月28日	総合人間学部教授 佐 伯 啓 思	世紀末世界に漂流する日本
11月11日	総合人間学部教授 中 西 輝 政	21世紀の世界像を求めて
11月18日	理学研究科教授 佐 藤 文 隆	20世紀型物理を考える
定 員 150名		
受講料 6,000円（全講義を通しての受講料です。）		

☆水曜講義

開 講 日	講 師	テ ー マ
10月16日	医学研究科教授 武 部 啓	人間の遺伝学—遺伝子研究の倫理—
10月23日	文学研究科教授 中 務 哲 郎	ギリシャ神話にみる生と死
10月30日	総合人間学部教授 吉 田 忠	情報化社会と統計調査の危機
11月 6 日	工学研究科教授 池 田 克 夫	マルチメディアとその周辺
11月13日	超高層電波研究センター教授 松 本 紘	太陽系の開拓に向けて
定 員 各講義 150名		
受講料 各講義 1,200円		

○会 場 法経第二教室

○時 間 午後6時30分～8時30分

○受講資格は問いません。

○申込み・問合せ先 庶務部研究協力課研究協力掛（内線2041）

京都大学市民講座の開講

本学では、来る10月19日、26日、11月2日の各土曜日に広く一般市民を対象とする「京都大学市民講座」を下記のとおり開講します。

本講座は、財団法人京大会館楽友会の協力の下に、昭和54年以来毎年開かれているもので、今年度は、「ととのえる」を共通テーマに、総合大学の特色を生かして学問の諸領域にわたる講義が行われます。

本学教職員並びに学生については、50名の特別受講枠（無料）を設けていますので、受講希望者は所属部署の事務担当掛へ申し込んで下さい。

記

講義日程 共通テーマ『ととのえる』

開 講 日	テ ー マ	講 師
第1日 10月19日（土） 13：00～16：40	開講のあいさつ	総 長 井 村 裕 夫
	都市をととのえる	工学研究科教授 青 山 吉 隆
	食と環境をととのえる	農学部教授 嘉 田 良 平
第2日 10月26日（土） 13：00～16：30	文化習慣をととのえる	文学研究科助教授 松 田 素 二
	心をととのえる —フロイトの自己分析—	人間・環境学研究科助教授 新 宮 一 成
第3日 11月2日（土） 13：00～16：40	ライフスタイルをととのえる —糖尿病をふせぐために—	医学研究科教授 清 野 裕
	生涯学習をととのえる	教育学部教授 上 杉 孝 實
	閉講のあいさつ	経済学部教授 池 上 惇
定 員 400名 受講料 2,000円（全講義を通しての受講料です）		

○会 場 法経第四教室

○申込み・問合せ先 庶務部研究協力課研究協力掛（内線2041）

—公開講座終了報告—

○医療技術短期大学部第9回健康科学公開講座

「日々の健康づくり」

期 間

7月6日（土）～27日（土）（毎土曜日）

講習科目及び講師

「からだを守る健康づくり」 教授 笹田 昌孝

「食事がつくる日々の健康」 講師 豊田久美子

「太っているのはなぜ悪いか？」

—内臓型肥満と糖尿病をめぐる—

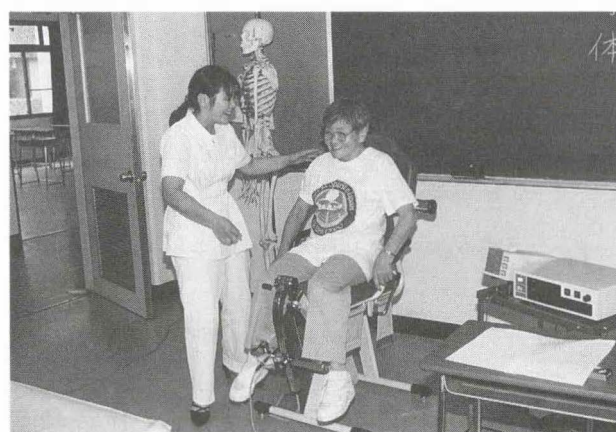
教授 中井 義勝

「健康な骨格づくり」 助教授 笠原 勝幸

「体力と運動（実習）」 助教授 黒木 裕士

助教授 市橋 則明

「心臓と健康」 教授 藤田 正俊



「こころの健康」

—こころに健康はありうるか？—

教授 松本 雅彦

受講者数 57名

○農学部公開講座

「農林経済・経営・簿記講習会」

期 間

7月22日（月）～26日（金）

講習科目及び講師

第1クラス

「農業経営の改善と複式簿記：原理と応用」

教授 稲本 志良・助教授 小田 滋晃

第2クラス

「地域農業及び農業経営の現代的課題と計画・
管理の方策」

教授 藤谷 築次・助教授 武部 隆

講師 新山 陽子

第3クラス

「開発途上国の農業・農村発展問題—日本・欧
米とのかかわり—」

教授 辻井 博・講師 浅見 淳之

助手 中田 義昭

受講者数（各クラス合計） 79名

○農学部公開講座

「生物のマクロから超ミクロまでのスケールトラ
ベル体験」（平成8年度文部省理工系教育推進プロジェクト
による）

期 間

7月25日（木）、26日（金）、29日（月）～31日
（水）

講習科目

「生物における大きさの意味」

「樹木の多様性と生育環境」

「シロアリの生態と木材の消化機構」

「ミクロ体験」

「パソコン体験」

講師

教授 藤田 稔・助教授 藤井 義久

助教授 高部 圭司・講師 仲村 匡司

助手 澤田 豊・助手 吉永 新

助手 吉村 剛（木質科学研究所）

受講者数 70名（高校生）

○情報処理教育センター公開講座

「パーソナルコンピュータとインターネットの活
用」

期 間

7月29日（月）～31日（水）

講習科目

「計算機とオペレーティングシステム
（Windowsの基本操作）」

「インターネットの利用（WWW等）」

「マルチメディアの利用（MS-Wordでの実習）」

「ネットワークの利用（UNIXとの連携：telnet,
ftp, etc.）」「インターネットによる情報発信（WWWホー
ムページの作成）」「BASICによる簡単なプログラムの作成（MS-
EXCELでの実習）」

講師

助教授 藤井康雄・助手 辻 齊・伊藤 誠

受講者数 26名（中学校教員）

○理学部公開講座

「現代数学展望」

期 間

7月29日（月）～8月2日（金）

講習科目及び講師

「大域解析とはなにか」 教授 深谷 賢治

「凸錐体」 助教授 野村 隆昭

「代数方程式について」 助教授 森脇 淳

受講者数

45名（高校生・大学生）

○農学部附属演習林公開講座

「森のしくみと働き—芦生演習林への招待—」

期 間

8月1日(木)～8月3日(土)

講習科目及び講師

「芦生の自然について」

芦生演習林の概要 助教授 酒井 徹朗

森林と水 講師 大手 信人

芦生の樹木 助手 金子 隆之

「天然林内での講義並びに実習」

教授 川那辺三郎・教授 竹内 典之

教授 大畠 誠一・助教授 酒井 徹朗

講師 柴田 昌三・助手 金子 隆之

助手 山崎 理正

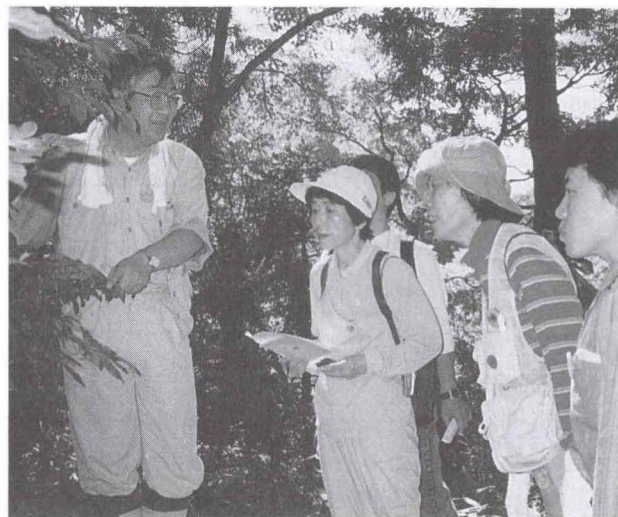
「森林と人間の関わり」

芦生の森林 教授 大畠 誠一

都市近郊林について

—イギリスにみる身近な森の管理—

講師 柴田 昌三



演習林の充実と発展

—熱帯林研究機構の試みを例に—

教授 神崎 康一

受講者数 52名

○数理解析研究所公開講座

「数学入門」

期 間

8月5日(月)～9日(金)

講習科目及び講師

「プログラミング言語、状態と型」

助手 ガリグ, ジャック

「リーマン面」

助教授 古田 幹雄

「漸近挙動を巡って：太鼓の形と酔歩」

教授 高橋陽一郎

受講者数 101名

○霊長類研究所公開講座

「霊長類の進化」

期 間

8月22日(木)～23日(金)

講習科目及び講師

総合案内

助手 鈴木 樹理

「霊長類の利用について」 助教授 川本 芳

「脳の発達と加齢」 教授 林 基治

「チンパンジーの野外調査について」

教授 加納 隆至

「霊長類の脳のはたらき」 教授 三上 章允

「形態、骨学実習」 助教授 濱田 穰

「心理学実習」 教授 松沢 哲郎

「サル野外行動観察実習」 助手 松村 秀一

「遺伝学実習」 助手 平井 啓久

受講者数 74名

○防災研究所公開講座

「防災学を地域防災計画に活かす」

—防災研究者と実務者との連携をめざして—

期 間

8月19日（月）～20日（火）

講習科目及び講師

「総合防災」 教授 亀田 弘行

「災害対策基本法と防災基本計画」

教授 河田 恵昭

「大気災害」 教授 光田 寧

「水災害」 教授 椎葉 充晴

「地盤災害」 教授 佐々 恭二

「地震災害」 助教授 鈴木 祥之

「情報システム」 教授 林 春男

「災害の社会科学」

—災害時の人間行動—

客員教授 広瀬 弘忠

「地域防災計画の現状と展望(1)」

東京都都市計画局開発計画部長 山下 保博

「地域防災計画の現状と展望(2)」

兵庫県副知事 溜水 義久

「パネルディスカッション」

—地域防災計画に求められるもの—

コーディネーター 教授 河田 恵昭

パネラー 教授 入倉孝次郎

教授 椎葉 充晴

兵庫県副知事 溜水 義久

客員教授 広瀬 弘忠

東京都都市計画局開発計画部長 山下 保博

受講者数 344名

○総合人間学部公開講座

「環境としての自然・社会・文化」

—創造的共生に向けて—

期 間

9月2日（月）～4日（水）

講習科目及び講師

「共生時代のリスク・コミュニケーション」

—その思想的背景、技術、効果—

名誉教授 木下 富雄

「環境問題における日本の経験と予防原理」

人間・環境学研究科教授 北畠 能房

「創造性と言葉のエコロジー」

教授 山梨 正明

「地球システムの変動」

—地球内部の脈動史— 教授 巽 好幸

「生物の共生関係から見た自然」

助教授 加藤 真

「技術・環境・人間」

—現代文明の危機としての

環境問題とその克服— 教授 有福 孝岳

受講者数 86名

お知らせ

平成 8 年 京 都 大 学 文 学 部 博 物 館 秋 季 企 画 展 の 開 催

本学文学部博物館では、下記のとおり秋季企画展「荘園を読む・歩く―畿内・近国の荘園―」を開催いたします。本学の教職員・学生は無料です（なお、入館の際は職員証または学生証を呈示して下さい）。

期 間 10月29日（火）～12月7日（土）

開館時間 火曜日～土曜日 9：30～16：30

（入館は閉館30分前まで、日・月・祝日は休館）

場 所 博物館 企画・総合展示室（1F・2F）

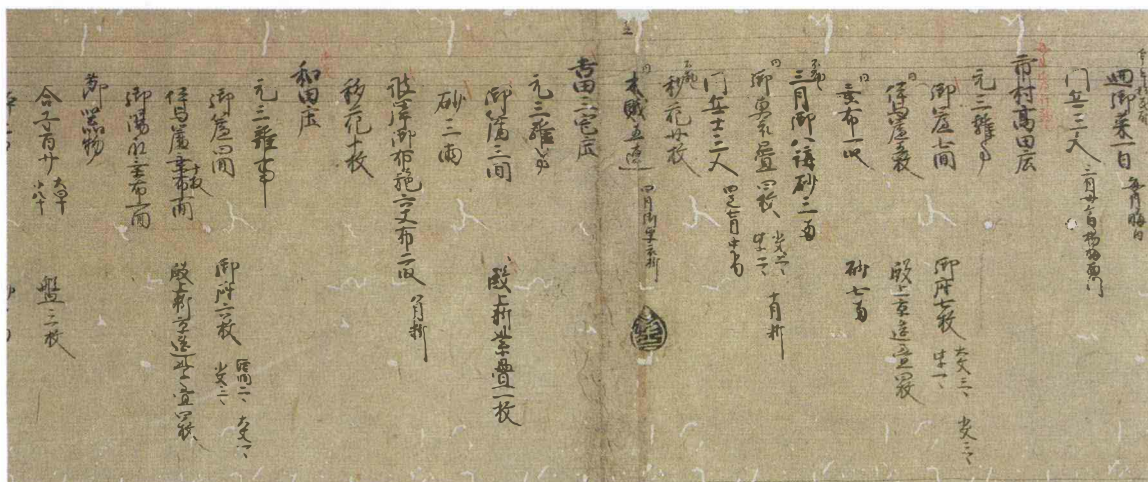
展示内容

日本の古代・中世における荘園および荘園制は重要な研究テーマのひとつである。とくに、戦後の日本中世史研究は荘園を舞台にして始まり、今に至るまで研究史上もっとも大きな蓄積を有する分野であるといっても過言ではない。一方、近年の著しい開発の進展と全国的に行われている圃場整備事業の結果、農村からは古代・中世以来の歴史的景観が急速に失われてしまった。しかし、そうした状況に対する危機感の中で、荘園故地の現況調査がさかんに行われるようになった。消えていく歴史的景観が記録保存され、得られたデータをもとにした新たな研究の動向がみえてきている。

今回の展示は、そうした研究史や現在の研究状況を意識しつつ、4つの小テーマで構成されている。「1. 荘園の開発」では、日本史研究室の院生・学生が主体となって実施してきた現況調査の成果を取り入れつつ、東大寺領播磨国大部荘の開発の歴史を展望する。「2. 荘園の歴史」では、畿内・近国に位置する6ヶ所の寺領荘園を時代順に取り上げ、変化する荘園の歴史の局面を綴る。「3. 荘園の集積と伝領」では、荘園領主のもとに荘園が集積され、そして編成され、伝領されていく様子を追求する。「4. 荘園支配の諸相」では、これも日本史研究室の面々が数年来調査に足を運んでいる東大寺領伊賀国黒田荘を舞台に、今なお行われている東大寺二月堂への松明調進行事や東大寺と荘園を結ぶ古道を取り上げて、領主による支配の様相を描く。以上の4テーマによって、荘園の歴史をできるだけ具体的な形で展覧したい。

なお、1階総合展示室では考古常設展示「日本古代文化の展開と東アジア」を行っています。

（文学部）



平成 8 年度附属図書館秋季展示会 「『今昔物語集』への招待」の開催

附属図書館では、例年、公開展示会を開催しておりますが、このたび所蔵の鈴鹿本「今昔物語集」が本年 6 月、国宝に指定されたことを記念して、この「今昔物語集」を中心として、重要文化財も併せて公開いたします。（『京大広報』No. 504, 1996.7 参照）

鈴鹿本「今昔物語集」は、平成 3 年吉田本町に在住する鈴鹿 紀氏から本館に寄贈されたものです。「今昔物語集」は、わが国の説話集の中で最も規模が大きく、多様な内容をもつものですが、「鈴鹿本」は現存するいずれの諸本にも先行するという意味で祖本といわれています。

この他、明経博士家としてわが国の漢学史に重要な位置を占める清原家家学書等の重要文化財指定図書も同時に展示いたします。

資料展示の他、インターネットを介しての電子展示も併設いたします。

この展示会に関連して、総合人間学部 西山良平助教授の講演会も開催いたしますので、ご来聴下さい。

展 示 会：「今昔物語集」への招待—鈴鹿本「今昔物語集」国宝指定記念—
同時展示：重要文化財指定図書

会 期：平成 8 年 11 月 11 日（月）～11 月 17 日（日）
10：00～16：00（入場は 15：30 まで）

会 場：附属図書館展示ホール（3 階）

講 演 会：「今昔物語集」の〈構造〉と歴史学

講 師：西山良平助教授（総合人間学部）

日 時：平成 8 年 11 月 15 日（金）13：30～15：00

会 場：附属図書館 AV ホール（3 階）（定員 110 名）

（備考）展示会、講演会とも一般公開で入場は無料です。

（附属図書館）